



地人館
E-books

デモ版 pdf

生き方を見つける羅針盤
折れない心をつくる

禅の言葉 100

田中治郎 著



はじめに

わけのわからない言葉のやりとりを称して「ぜんもんどう禪問答」といいますが、禪問答とは本来、禪の指導者が修行僧に課題を与え、これについて思考させて問答をする中で悟りに導くという高次元の対話です。高次元であるがゆえに一般の人にはなにごなんだかわからず、ちんぷんかんぷんです。だから「禪問答」といえば、「ちぐはぐでわかりにくい問答」（『広辞苑』）のことをいうようになったのです。

この禪問答で提出される課題の言葉を、「こうあん公案」といいます。公案とは「こうふ公府のあんどく案牘」の略で、中国では権威のある役所の公文書を意味しました。これにはだれも逆らえない威光があったために、転じて禪では、修行僧を悟りに導く先人の権威ある言葉を公案と呼ぶようになり、坐禪の修行をする僧に与えられる問題となったのです。

本書では、この公案から百の禪語を選び出し、著者なりに読み取りました。

公案は禪の指導者や修行僧の専売特許なのかというと、決してそうではないと思います。私たち俗界に暮らす普通の人間にとっても、非常に示唆しさに富み、生きる指針を与えてくれる言葉が満

載されているのが公案の禪語だと思っています。

公案は、長い歴史を経て中国から日本に伝わり、現代に生きています。その風雪の中で人間の真実が凝視され、深い人生観が凝縮され、その言葉は難解でありながらも普遍化されてきました。だから、私たち一般の人間にとっても魅力的であり、折れそうになった心を支えてくれる名言を多々見いださるのだと思います。

古い話ですが、元横綱の貴乃花が横綱に昇進するとき、「不惜ふしやくしんみょう身命」と言って相撲に命をかける決意を語り、話題になりました。このフレーズは『法華ほけきょう經』の言葉ですから禪語とはいえないかもしれませんが、みごとに当時の貴乃花の気持ちを表した仏教語でした。

また、福岡ダイエーホークス監督の工藤公康さんは、「前後ぜんごさいだん際断」という禪の言葉に共感を覚えると話していました。「前後際断」については本書の中でも紹介していますが、とても深い言葉です。

さらに、東京オリピックの聖火ランナー、女子サッカーの元日本代表なでしこジャパンの佐々木則夫前監督は、これも本書にある「歩歩ほこれうしじょう是道場」という禪語が座右ざゆうの銘めいだといっています。

このように、人々は自分の心を支える言葉を求め、見つけ、それを羅針盤らしんばんとして生きようとしてます。

いま「四字熟語」がはやっているといいますが、それも羅針盤としての言葉を探し求める庶民の欲求の表れではないでしょうか。

政治も、経済も、社会制度も行きづまりを見せ、先の見通しがきかずにいるところに毎年のように自然災害やウイルスなどに猛襲されています。しかし、こんな時代だからこそ、私たちは言葉の力をバネにして、この苦境を乗り越えていこうではありませんか。

田中治郎



呵呵大笑する僧 表情豊かな五百羅漢はものごとにこだわらない禅僧のイメージだ。(箱根仙石原の五百羅漢)

【禪の言葉100】もくじ

はじめに 2

第一章 生きる道しるべを見つける 15

- 01 主体性を持つて生きる 主人公しゅじんこう——16
- 02 論と実践を兼ね備える 智目行足ちもくぎょうそく——18
- 03 お金よりも大事なものがある 家貧未是貧いえひんにしていまだにれひんならず——20
- 04 強風に負けないしなやかさを持つ 八風吹不動天辺月はつふうふけどもどうぜすてんべんのかき——22
- 05 反省が自分を磨く 照顧脚下しやうこきやくか——24
- 06 後世の人のための道しるべをつくる 巖谷裁松がんくさいしょう——26
- 07 やりすぎてはいけない 勢不可使尽いきおいつかじつすべからず——28
- 08 見返りを求めない 無功德むくどく——30

- 09 成功に安住してはならない 百尺竿頭進ひやくしやくかんとうしん一步いっぽ — 32
- 10 思いやりのある言葉は人の心を豊かにする 愛語あいご — 34
- 11 相手の成長段階を見極めて対応する 挨拶あいさつ — 36
- 12 真の友を持つ 相識満天下あいしるはてんかみつあも 知心能幾人こころをしるはよくいくにんなんらん — 38
- 13 自分を律する 黄泉こうせん — 40
- 14 与えられた命を精いっぱい生きる 馬大師不安ばだいしふあん — 42
- 15 だれも差別しない心を持つ 趙州喫茶去じょうしゅうきさつこ — 44
- 16 与えられた環境や条件をすべて受け入れる 歩歩是道場ほほこれどうじょう — 46
- 17 心を込めて一日一日を送る 平常心是道びやうじょうしんこれどう — 48
- 18 自己を忘れて全力を投入する 摘茶更莫別思量ちつをうつとんもくべつしやう — 50
- 19 悪を行なわず善を行なう 諸惡莫作 衆善奉行しよあくまくなさ しゆぜんぶぎやう — 52
- 20 ひそかに徳を積む 潜行密用せんこうみつゆう — 54
- 21 よい行ないは必ず自分に返ってくる 善因招善果ぜんいんはぜんかをまねく — 56
- 22 事はさりげなく処理し、こたわらない 風来疎竹かぜふりしゆく 風過而竹不留声かぜすてたけにこみえをためず — 58
- 23 大事は些事の中にある 趙州洗鉢じょうしゅうせんぱつ — 60

24	見返りを求める坐禅ではないけない	南嶽磨埵	62
25	人間に生まれるのは希有なこと	盲亀浮木	64

第二章 ものの見方を変えて新しい世界に学ぶ 67

26	他人と比較するのをやめる	隻手音声	68
27	真実は目の前にある	只在目前	70
28	ありのままの自分を見つめる	不思議不思議	72
29	「いま・ここ」に生きる	前後際断	74
30	すべての人がそれぞれに尊い	盤山精肉	76
31	ものの見方を変えてみる	趙州狗子	78
32	悲観・樂觀、どちらにも陥るな	子生而母危	80
33	自分をひけらかすな	和光同塵	82
34	苦しみから逃げようとするな	洞山無寒暑	84
35	心しだいでも道場になりうる	直心是道場	86

36 人の真価は困難に直面したときにわかる 事難方見丈夫心ことごとくあつてまことにみるじょうぶのこころ——88

37 一生に一度の出会いと思つて人に接する 一期一会いちごいちえ——90

38 権威にとらわれるな 麻三斤まささん——92

39 すべては自分の心の反映 心外無別法しんげむべつぽう——94

40 今日この日を精いっぱい生きる 日日是好日にちにちこれこうにち——96

41 党派にとらわれない 一仏心印いちぶつしんいん——98

42 言葉のレトリックに引つかかるな 雲巖大悲心眼うんがんだいひしゆげん——100

43 心がなければなにも見えない 非風非幡ひふうひばん——102

44 偏らずにものごとを見る 荷葉团团以鏡かしょうだんたんとしてかがみよりもまどかなり——104

45 無心の境地になる 橋流水不流はしはながれてみずはながれず——106

46 どちらが本物を常に問いかける 倩女離魂せいじよりこん——108

47 仏の慈悲はだれにでも及んでいる 掬水月在手みづをきくすればつききてにあり——110

48 物ではない価値基準をつくれ 迷己逐物おれにまよつてもをわづ——112

49 すべてを捨て切ったところに真理は宿る 無一物中無尽蔵むいちつちゅうむじんぞう——114

50 自己を追求する 仏道ぶつだう——116

第三章 心を解き放ち、ほんとうの自由を手に入れる

119

- 51 妄想してはいけない 莫妄想 まくもうぞう 120
- 52 答えは二者択一だけではない 婆子焼庵 ばすしょうあん 122
- 53 苦も楽も心が生む 心生種種法生 しんしょうしゅくしゆほふしうしうしう 124
- 54 素っ裸の自分を見る 一無位真人 いちむいのしんにん 126
- 55 捨てることは自由になること 放下著 ほうげじやく 128
- 56 不安は心がつくる 達磨安心 だるまあんじん 130
- 57 一人ひとり生き方は違う 白馬入蘆花 はくばにゅうろか 132
- 58 敬虔な心を持つ 帰依三宝 きえさんぼう 134
- 59 いかなる権威にもとらわれるな 逢仏殺仏 逢祖殺祖 ほうぶつせつぷつ ほうそせつそ 136
- 60 敬つとともに歩む 把手共行 はしゆきようこう 138
- 61 なりきることが大事 百丈野鴨子 ひやくじやうやおうす 140
- 62 懸命に生きれば必ず光明が見える 随処作主 立処皆真 ずいしよさしゆ りつしよかいしん 142

- 63 閉じ込められた仏性ぶつしょうを守る 白雲抱幽石はくうんゆうせきをだく 144
- 64 自力じりきを尽くして他力たうりきに至る 生死しやうじ 146
- 65 苦勞が人間を育てる 泥多どろおければどけおいな仏大 148
- 66 机上の學問には限界がある 徳山燒經とくさんしょうきやう 150
- 67 物まねで真理はつかめない 俱胝豎指ぐていじやし 152
- 68 心地よい疲勞感が人生の真髓 坐久成勞ざきゆうじやうらう 154
- 69 修行をしてこそ仏性ぶつしょうは生きる 風性常住無処不周ふうじやうじやうじゆうどししよあまねからざるなし 156
- 70 二元對立的な見方を変える 南泉斬猫なんせんざんみやう 158
- 71 心を無にすれば炎暑も氣にならない 滅却心頭火自涼しんごをめつぎやくすればひのおのずからすずし 160
- 72 自然に身を任せて本来の自分に戻る 雲無心以出岫くもむしんにしつてしゆをいず 162
- 73 執着する心をなくせ 応無所住而生其心おうむしよじゆうにしやうごしん 164
- 74 死を自覺したとき、生の大切さがわかる 死中得活しちゆうにかつをえたり 166
- 75 あるがままのこの存在がすばらしい 独坐大雄峰どくざだいゆうほう 168

第四章 羅針盤を手に真理を探す旅に出よ 171

- 76 万人に救いの手は伸びている 一月在天影印衆水 172
- 77 比べない 至道無難 174
- 78 理想は自分の心の中にある 無事は貴人 176
- 79 あらゆるものは生じ、滅していく 不雨花猶落 178
- 80 老いを嘆いてもしかたがない 歳々年々人不同 180
- 81 あらゆる存在はみな尊い 乾屎橛 182
- 82 言葉では表し尽くせない真理をつかむ 拈華微笑 184
- 83 真理は師から弟子へと継承される 迦葉刹竿 186
- 84 言葉を超えて心に伝わるもの 無説無聞是真般若 188
- 85 あらゆる存在が仏さまの教え 谿声山色 190
- 86 すべての存在が絶対であり、なにもものにも代え難い 山是山水是水 192
- 87 原点に帰れ 曹源一滴水 194
- 88 自分を支えるのは信仰心という杖 芭蕉拄杖 196

- 89 仏さまはいつも声をかけてくださっている 頻呼小玉元無事 198
- 90 五つの智慧で人格を完成させる 一華開五葉 200
- 91 真理だけは永遠に変わらない 大龍堅固法身 202
- 92 まず踏み入ってみる 龍門 204
- 93 一念を貫けば願いはかなう 水到渠成 206
- 94 絶妙のタイミングを見逃すな 啐啄同時 208
- 95 權威にとらわれず、真実の相を見抜く 丹霞焼仏 210
- 96 すべての存在が真実を表している 無情說法 212
- 97 欲を捨てることで清らかになれる 供養諸仏 214
- 98 自他の境界を越え、相手になりきる 庭前柏樹子 216
- 99 ありのままの自分で生きる 体露金風 218
- 100 あたりまえであることこそありがたい 柳緑花紅 220



沈思する羅漢（箱根仙石原の五百羅漢）

主人公

瑞巖ずいがんの彦和尚げんおしょう、毎日自ら主人公しゅじんこうと喚びよ、復た自ら応諾おうだくし、乃ちすなわ云いわく、惺惺せいせい著じやく、喏だく。他時たじ異日いじつ、人の喏だくを受くること莫なれ、喏だく。——『無門関』一二

❖ 瑞巖寺ずいがんじの師彦和尚しげんおしょうは、毎日自分を自分で「主人公しゅじんこう」と呼び、自ら「はい」と返事をしていた。あるときは「目を覚ませよ」と自分に言つて「はい」と返事をし、別の日は「人にだまされるなよ」と自分に言つて「はい、はい」と返事をしていた。

唐末とうまつ、中国浙江省せつしやうしやうの瑞巖寺に住んでいた瑞巖師彦和尚の話です。

師彦のみならず、私たちの中にもこのように二人の自分がいることは間違いないと思います。一人は他人や権威、世間に引きずられてしまう自分です。そしてもう一人は、そんな自分に疑問を持ち、ほんとうの自己を取り戻さなければならぬと思う自分です。

後者のほうをここでは「主人公」と呼び、そのような主体性を持って生きるべきことを教えているのです。

近年は毎年のように大きな自然災害に見舞われ、特に失業率が増え、就職が難しくなっているといえます。しかし、求人と求職のミスマッチも多いと聞きます。

ある面では、みんなが大企業や安定企業を求めるため就職できない人が大勢出る一方、中小や零細企業には人が集まらないのです。

みんなが求めるところが安心だろうという考えは、世間に引きずられた発想です。ほんとうに自分がやりたいことはなんなのかと考え、生きがいを重視して仕事を探せば、中小や零細の中にしかない場合だってあります。

自分の中の主人公を呼び出し、主体的に生きていきたいものです。

趙州洗鉢

趙州、因みに僧問う、某甲、乍入叢林、乞う師指示せよ、州云く、喫粥し了るや未だしや。僧云く、喫粥し了る。州云く、鉢盂を洗い去れ。其の僧省有り。——『無門関』七

❖ある僧が、趙州和尚に尋ねた。「私は僧堂（叢林）に入つたばかりの新参者です。どうか禅の真髓を教えてください」と。すると趙州は、「朝食のお粥は食べたのかね。それともまだかね」と問うた。僧は、『はい、食べ終わりました』と答えた。趙州は、「では鉢盂を洗っておきなさい」と言った。これを聞いて、僧はいささか悟ることがあった。

唐代の名僧である趙州從諗に新参の僧が禅の真髓を尋ねると、趙州は『朝食はすんだのか』と問います。この問いが、実は僧の質問に対する趙州の答えだったのです。

禅の真髓とは、どこかほかの特別なところにしまつてあるわけではありません。朝起きて顔を

洗う。朝食をとる。食器を洗う。掃除をする。会社員なら出勤して仕事をする。昼食をとる。人と会う。本を読む……等々、日常のこれらの些事^{さじ}に全力を尽くし、自分を投入することこそが禅なのでしよう。行住坐臥^{ぎょうじゅうざが}、すべてが禅の顕現なのです。

だから趙州は、大事を含んでいる些事である朝食のことを問い、それでも気づかない僧に鉢を洗えと言ったのです。そこに至ってはじめて、僧は気づきました。

雑用を嫌って仕事を辞める若者が多いと聞きます。どんな些末な仕事でも、本気で考え、自分を投入すれば雑用なんてないはず。毛嫌いをせず、工夫して取り組みましょう。



ほほえむ僧（箱根仙石原の五百羅漢）

趙州狗子^{じょうしゅうくす}

趙州和尚^{じょうしゅうおしょう}、因みに僧問う、狗子^{くす}に還つて^{かえ}仏性^{ぶつしょう}有りや也^また無しや。州曰く、無^む。——『無門^{むもん}関^{かん}』一

❖ 一人の僧が趙州和尚^{じょうしゅうおしょう}に尋ねた。「犬（狗）に仏性^{ぶつしょう}はありますか、それともありませんか」と。すると趙州は、「無」と答えた。

唐代の禪の名僧、趙州^{じょうしゅう}從諗^{じゅうしん}の逸話です。

ある日、修行僧が趙州に、「犬に仏性はあるか、ないか」と質問すると、趙州は「無」と答えたということです。

「仏性」という語はしばしば登場していますが、「あらゆる存在はみな仏になる可能性（仏となる種子）を持っている」という考え方で、「一切衆生悉有仏性」（『涅槃經』）などという言葉で

言い表されます。その可能性が煩惱で覆い隠され、表に出てこれないでいるのが私たち衆生だとされるわけです。

この考え方はのちに拡大解釈され、生き物（有情）はもちろん、石や植物などの非生物（无情）もあるいは無情）も仏性を持つとされ、「草木国土悉皆成仏」などといわれました。

だから、僧が趙州に期待していた答えは、当然「有」でした。ところが趙州は、「無」と答えました。なぜでしょう。

僧の問いかけは、「有か無か」という二元対立的なものでした。相対の次元を抜け出られず、差別を生む二元対立的な発想は、禅の嫌うところです。趙州はその発想を否定するため、「有・無」という相対的な次元を止揚する意味での絶対的な「無」を唱えたのです。僧にものの見方、考え方の変革を迫る答えでした。

直心是道場

直心じきしんは是これ道場どうじょうなり。虚仮こけなきが故ゆえに。

——『維摩經』「菩薩品」

❖ まっすぐな心はすなわち道場である。うそ偽りがないからだ。

道場とは本来「菩提道場」の略で、お釈迦さまが悟りを開かれた菩提樹の下の座をいいます。それがのちに仏道修行をする場所をいうようになり、さらには武道をはじめ、心身を鍛練する場所を道場と呼ぶようになりました。

『維摩經』には、光嚴童子こうごんどうじと維摩居士ゆいまこじのやりとりが記されています。光嚴童子は仏道を学ぶ道者で、維摩居士は在家の身ながら仏道を究めた富豪です。

光嚴童子が城門を出ようとしたとき、反対方向からやって来た維摩居士と出会いました。童子が「どちらからいらっしやったのですか」と聞くと、維摩居士は「道場から来た」と答えます。

はて、道場は城内にあるはずだが、と思いながら、童子が「閑静な道場はありませんか」と問うと、維摩居士は「直心是道場」じきしんこれどうじょうと答えるのです。

直心とは、素直でまっすぐな心、邪心じやしんのない心のことでしよう。うそや偽りのないそういう心であれば、場所を選ばず、どんなところでもりっぱな道場になる、と維摩居士は言っているのです。私たちも、例えば電車の中であっても、いい本を夢中になって読んでいればそこが静かな図書館に変じているといった経験をしています。

ものごとをするのに、必ずしもりっぱな環境や建物は必要ではありません。要は心の問題ということでしょう。

麻三斤

洞山和尚、因みに僧問う、如何なるか是れ仏。山云く、麻三斤。——『無門関』一八

❖ある僧が、洞山守初禅師に質問した。「仏とはなんですか」と。すると洞山は、「麻三斤」と答えた。

この「如何なるか是れ仏」という質問は、後述の「庭前柏樹子」に出てくる「祖師西来意」とともに、禅門では仏教の根源を問う問いとして頻出します。

ある僧が雲門宗の祖である雲門文偃に「仏とはどのようなものですか」と尋ねると、雲門は「乾屎橛（糞かきべら）」と答えたとありますが（81「乾屎橛」参照）、これもよく似た公案です。洞山守初禅師は、20「潜行密用」に出てくる洞山良价とは別人です。この洞山に、ある僧が「仏とはなにか」と質問すると、「三斤の麻だよ」と答えたというのです。その真意はなんなのでしょう。

洞山の住んでいた襄州（江西省）は衣にする麻の産地だったといえますから、洞山はたまたま手もとにあつた麻を見て、「麻三斤」と答えたようです。つまり、なんでもよかつたのです。

それよりも、僧の質問が問題でした。「如何なるか是れ仏」と問うたとき、その質問に洞山は仏を絶対視する意識を見て取つたのだと思います。

禅では、たとえ仏であれ祖師であれ、それを絶対視し、権威化すると対象にとらわれるとしてそういう態度を否定します。だから、洞山の真意は仏の権威化を否定したのだと思います。

また、「草木国土悉皆成仏」の理念からいえば麻三斤もりっぱな仏、これを拝む態度こそ仏心の表れといえるのではないのでしょうか。



天をあおぐ僧（箱根仙石原の五百羅漢）

達磨安心だるまあんじん

達磨面壁す。二祖雪に立つ。臂を断つて云く、「弟子は心未だ安からず。乞う、師安心せしめよ」。磨云く、「心を將ち来れ、汝が為に安んぜん」。祖云く、「心を覓むるに了に不可得なり」。磨云く、「汝が為に安心し竟んぬ」。——『無門関』四一

❖達磨が壁に向かつて坐禅をしていた。二祖の慧可が雪の中に立っていた。そして、自分のひじを断ち切って言った。「弟子は心がまだ不安です。師よ、安心させてください」と。すると達磨は、「ではその心を持ってきなさい」と言った。二祖の慧可は、『心を探したのですが、どうしても見つかりません』と答えた。達磨は言った。「おまえの心を安心させてあげたよ」と。

禅の初祖といわれ、禅を中国に伝えた達磨は、インドから中国に渡り、崇山の少林寺で九年間壁に向かつて坐禅を続けたといえます。これは「面壁九年」という故事として知られます。

その達磨に、のちに禅の二祖となる慧可^{えか}が弟子入りを願いました。しかし、達磨はこれを見せずに坐禅を続けます。慧可は固い決意を示すために、自ら左のひじを断ち切って差し出し、弟子入りを果たします。そのときの師弟のやりとりが右のものです。

「不安な心を持つてこい」と言われて、私たちが持つていけるでしょうか。

それは無理です。心は定まったものではなく、縁^{えん}に従って動くものだからです。最初から不安な心があるのではなく、心が不安になるのです。そのことに気づいたとき、私たちは不安に対処できます。不安にとらえられるのではなく、不安をとらえて客観視することができるようになるのです。

達磨はまるで、優秀な臨床心理士のようなようです。

百丈野鴨子ひやくじょうやおうす

馬大師ばだいし、百丈ひやくじょうと行くついで、野鴨子やおうすの飛び過ぐるを見る。大師だいし云く、これ什麼なんぞ。丈ちやう云く、野鴨子やおうす。大師だいし云く、いずれの処ところにか去る。丈ちやう云く、飛び過ぎ去る。大師だいし遂ついに百丈の鼻頭びとうをひねる。丈、忍痛にんつうの声をなす。大師だいし云く、何ぞ曾かつて飛び去らん。——『碧巖録へきがんろく』五一

❖馬祖道一ばそどういつだいし大師が弟子ひやくじょうの百丈ひやくじょう懷海えかいと旅をしているとき、野鴨のがもがバタバタと飛び過ぎていった。馬祖は、「あれはなんだ」と言った。百丈は、「野鴨でございます」と答えた。「どこへ行ったのか」と馬祖が問うと、「どこか遠くへ飛び去りました」と百丈は返答した。そのとき、馬祖はいきなり百丈の鼻先をつまみ、ひねり上げた。百丈が悲鳴をあげると、馬祖は、「野鴨は飛び去ってない。ここにいるではないか」と言った。

26 「隻手せきしゅ音声おんじやう」の項などで言いましたが、禅では貧富、美醜、強弱、善惡などという二元対

立的なものの見方を嫌います。同時に、自分と他者、自分と対象物を対立させて相対的に見ることも否定します。

そこから出てくるのは比較の視点で、優越感や劣等感などという苦しみのもとを生み出し、真理とはかけ離れた世界に人を住まわせるからです。

だから、禅では相手や対象物に「なりきる」ことを教えます。坐禅は無になりきるためにするのです。

百丈は優秀な弟子でしたが(75「独坐大雄峰」どくざだいゆうほう参照)、なりきることにおいてはまだ未熟さが残っていました。馬祖はそこを指摘したのです。禅観を研ぎ澄ませば野鴨にもなりきるはず。野鴨は飛び去ってなどいない。百丈としてここにいるのではないかと。野鴨が百丈か、百丈が野鴨かという境地を得るように示唆しさしたのです。

南泉斬猫

南泉和尚、東西の両堂が猫児を争うに因んで、泉乃ち提起して云く、大衆、道い得ば即ち救わん、道い得ずんば即ち斬却せん。衆、対うる無し。泉遂に之を斬る。晩に趙州、外より歸る。泉、州に拳似す。州乃ち履を脱して頭上に安じて出づ。泉云く、子若し在りしなば、即ち猫児を救い得たらん。——『無門関』一四

❖南泉和尚は、東西の禪堂の修行僧たちが猫をめぐる争つていたので、その猫の首をつかんで言った。「この猫について、究極の言葉を言え。もし言えなければ、この猫を斬る」と。すると、だれもなにも言えなかった。南泉はこの猫を斬った。その夜、南泉の弟子の趙州が帰ってきたので、南泉はいきさつを話した。すると、趙州は黙つて履を脱ぎ、頭の上にそれを載せて部屋を出ていった。南泉は、「おまえがいてくれたら猫は救われたであろうに」と言った。

難しい公案です。いったいなにを言いたいのでしょうか。

一説では、修行僧たちは猫に仏性ぶつしょうがあるかないかで論争をしていたといえます。もしそうだとしたら、禅では否定される「有・無」という二元対立的な問題を机上に上げて議論していたことになります。有無、善悪、美醜、貧富など、二元対立的な視点は相対を超えられず、差別を生みます。だから南泉は、二元対立を超える究極の言葉を求めたのでしょう。その象徴が猫を斬るという例えだと思っています。

うがった見方かもしれませんが、履は左右で一对、二元対立のシンボライズです。趙州がそれを脱いで頭に載せたのは、二元対立を超えろという表現だとは考えられないでしょうか。そうだとすれば、趙州は南泉の問いにみごとに答えたことになります。



厳しい表情の僧（箱根仙石原の五百羅漢）

拈華微笑

世尊、昔、靈山會上に在って、華を拈じて衆に示す。是の時、衆皆默然たり。惟だ迦葉尊者のみ破顔微笑す。——『無門関』六

❖お釈迦さまは、昔、靈鷲山（靈山）の山上で説法したとき、花をひねって人々に示した。人々は何んのことがわからず、みな沈黙を守っていたが、ただ迦葉尊者だけがにつこりとほほえんだ。迦葉尊者とは、お釈迦さまの十大弟子の一人に数えられる高弟です。お釈迦さまは並みいる弟子たちに花をひねって示したのですが、だれもその意味がわからず、黙ってポカーンとしていました。そんな中、迦葉尊者だけがにつこりとほほえんだということは、お釈迦さまの言いたいことがわかったというサインを出したのです。

教えとは、基本的に言葉で説かれるものです。お釈迦さまも、弟子たちに言葉で教えを説かれ

ました。その記録が「経典」です。言葉とは、コミュニケーションに欠かせない大事な手段です。ですが、私たちが言葉で一つの事実なり真理を言い切ろうとしたとき、必ず漏れるものがあります。事実や真理は多面的であり、言語は一面的にならざるを得ないからです。

だから私たちは、言葉の限界を知り、その奥にあるものをつかむ努力をしなければならいのでしょうか。そしてそれを感得したとき、人と人は心からわかり合えるのだと思います。

お釈迦さまが花をひねったのは、言葉を超えるもの（それを「禅」と呼んでもいいでしょう）をつかんでほしいというサインです。そのことを、迦葉だけがピンと理解したのです。



地人館 E-books オンデマンド版
紙面のイメージは電子版と異なります。

田中治郎（たなか じろう）

1946（昭和 21）年、宮城県生まれ。

文筆家。日本ペンクラブ会員。

横浜市立大学卒業後、出版社に勤務して主に児童書、仏教書の編集に携わる。現在は、仏教書、エッセイ、小説などの執筆や講演活動にあたる。

主な著書

『世界の地獄と極楽がわかる本』『折れない心をつくる名僧の言葉』（PHP 研究所）、『よくわかる仏教入門』『コミュニケーション力が UP するブッダの言葉』（佼成出版社）、『面白いほどよくわかる日本の宗教』『面白いほどよくわかる日本の神様』『面白いほどよくわかる浄土真宗』（日本文芸社）、『仏教のことが面白いほどわかる本』『釈迦の教えが面白いほどわかる本』（中経出版）、『生き方を学ぶ仏教入門』『歎異抄◆原文と現代語訳』（地人館 E-books）ほか多数。

ぜん ことば 禅の言葉 100

著者 たなか じろう
田中治郎

初版発行 2021 年 6 月 3 日

発行 ちじんかん
地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com/>

印刷・製本 有限会社 朋栄ロジスティック

©2021 Jiro Tanaka